

現在の河内山本・天台院周辺



桜並木の玉串川

1 天台院表門と境内



室町時代創建と伝えられる、東光が住持をつとめたお寺です。当初は僅か3畳ばかりの書齋から、数々の物語が創り出されました。境内には、東光の文学碑があります。



12 中野・山本共同墓地

2 闘鶏場(当時)

現在は住宅地になっています。農閑期の娯楽として、「軍鶏」同士を闘わせる、「闘鶏」が行われていました。東光はその様子を描くにあたり、全くの口伝であった闘鶏に関する用語等について丹念に調べ、100枚前後の原稿を完成するのに、実に2ヵ年余りを費やしました。

3 八阪神社(祇園さん)

天台院の向かいの通りにあり、作中の登場人物が集まる場所として、境内の集会所がしばしば登場します。7月の神社の祭礼では、村の若者に交じて東光が布団太鼓を担いでいる描写があります。



4 中ノ筋

天台院はじめ、寺社が連なっています。それらの表門が中ノ筋に向いていることから、古来はこの通りが中心だったことがうかがわれます。作中でも、場所の位置関係を示す目印としてしばしば登場します。



5 美人館

東光はじめ、村の住人が馴染みにしていた散髪屋で、作中にもその記述があります。店内には東光筆の「美人館」の扁額があります。



6 立石街道

まちを東西に横断するメインストリートで、通りに面して、作中に登場する場所が散在しています。当時村の人が八尾街道と呼んでいたのは本来は立石街道のことですが、作中では八尾街道と記されています。



7 縄手路

当時、隣村であった中野と小坂合の境界であった小道です。ここから内側が「我が村」という意識があったようで、そのような記述がしばしばみられます。



8 山本橋

中野村の東側、玉串川にかかる橋で、交通の要です。当時橋のたもとに毎晩夜泣きうどんの屋台が出ていて、これが物語の謎解きになる話があります。

9 山本八幡宮

石清水八幡宮から神霊を勧請した、山本新田の鎮守さんです。深夜のタクシーでの帰宅で、近所に気兼ねした東光が、ここで下車して天台院まで歩く描写があります。作中の登場人物が月例祭の日に「茹で川蟹」の店を出し、それが物語の発端になる話もあります。



10 河内山本駅

登場人物が鉄道を利用する姿が作中によく描かれています。普段の東光も所用で大阪へさかんに出かけしており、終電で帰宅する描写もあります。



11 山本新田住友会所跡

付近に宝永元(1704)年の大和川付替えによって開発された山本新田の住友会所がありました。現在山本コミュニティセンター敷地内に石碑があります。当地の歴史は、作中でもたびたび触れられています。

12 中野・山本共同墓地

旧名の「中野」の地名が残っている、数少ない場所です。登場人物のヒントになった人たちが眠っている、村の墓地です。

13 御野県主神社

東光のお気に入りの場所だったようで、作中にも登場します。天台院が手狭になった関係もあり、東光は千葉県佐倉市に転居する昭和50(1975)年まで、ここから少し南に行ったところに居宅を構えました。



今東光の『小説 河内風土記』を歩く

—河内山本・天台院周辺MAP—



今東光は、特命住職として八尾市中野(現在の西山本町)の天台院に移り住んだ昭和26(1951)年から24年間、この地に暮らし、数々の名作を生み、一躍世の脚光を浴びました。魅了され、愛したこのまちについて、東光はこう記しています。

「シャモの喧嘩にせよ、豆カチにせよ、河内音頭にせよ、僕でなければ書く人はないだろうし、後世にこの河内の風俗を伝える者はあるまいという自負があった。」

(『小説 河内風土記巻之一』自序)

『小説 河内風土記』は、全六巻におよぶ作品で、八尾の人々やまちを愛した東光のおもいが結実したものです。

本作には八尾をヒントに創作した物語が多数収められています。この地図を片手に、『小説 河内風土記』に記され、東光が過ごした時代のまちや風景を感じていただくことができれば幸いです。



今東光 資料館

KON TŌKŌ MUSEUM

〒581-0003 八尾市本町2丁目2番8号(八尾図書館3階) ●開館時間:10:00~17:00

●休館日:月曜日(但し祝日の場合は開館) ●Tel.072-943-3810